

第三章 サンクト・ペテルスブルグ—音楽の世界へ



サンクト・ペテルスブルグ
バルチースキー鉄道駅(1909年)



待合室

その日の晩、私はサンクト・ペテルスブルグのバルチースキー鉄道駅に到着し、待合室で腰を下ろした。私が紅茶とサンドイッチを注文すると、みずばらしい格好をしたウェイターが眠たげにビュッフェまで歩いていき、巨大なサモワールから水っぽい紅茶を注ぐと、レモンのスライスを浮かべ、スナックの皿を添えて、私のところに持ってきた。天井が高く広々としたホールにはほとんど人がいなかった。旅行者のほとんどはドロシキ「無蓋の四輪馬車」で自宅かホテルに向かっていた。私もそうしなければホテルに行けた。もうカネに困ってはいなかったのだ、もう前のように鉄道駅を無料宿泊所として使わせてもらう必要はなかった。でも、私は別のことを考えていた。四月末、晩の空気は温かく快く、夜はだんだんと短くなってきた。早々に夜は明けるはずで、そうしたら私は一刻も待たずに、夢に見たこの都市を見てまわりたいかった。

どの大きな駅でもそうであるように、ロシア皇帝ニコライ二世陛下の肖像画が

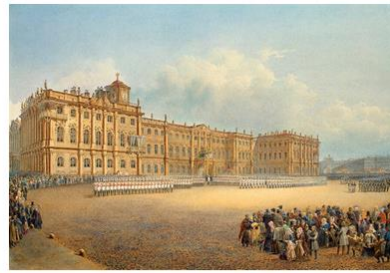
壁から見下ろしていた。彼の表情からは血に飢えたところなどまるでうかがえなかった。別の絵画では、美しくも悲劇的なツァーリツァすなわち皇后が、茨の冠のような王冠をかぶった姿で描かれていた。ふたりの間には、セーラー服を着た、ハンサムだがきゃしゃに見える小さな男の子がいた。別の絵画には、父親、母親、息子、そして四人の美しい娘たちが描かれていた。皇族などところがみじくもない、素朴で家庭的な家族画と見えた。十年も経たないうちに、七人全員が惨殺されることになるうとは……地下室で一人ずつ射殺され、死体はばらばらに切り刻まれ、窯で焼かれることになるうとは、だれに想像できただろう。



ニコライ二世、皇后、家族

隅には金色の背景に暗い色でキリストを描いた木製のアイコンがあり、前に置かれた小さな赤いランプの光に照らされていた。家庭的そのもののロマノフの一家を殺害した者たちは、このイエスの顔にも唾を吐きかけたことだろう。予期せぬ大変動が起きたのは、これからたった数年後だった。私はそれまでの短い歳月をこの地で勉学のために費やした。未来は知られていなかったものの、まるで心の奥底で時が迫るのを感じていたかのようにだった。リバプールのストリート駅から

ここまでやってくるのにほぼ三年を費やした。語学学校がまずいことになったので、私はリガに留まって一からやり直すことを迫られたため、すみやかにサンクト・ペテルスブルグに向かうことができなかった。時間を無駄にしたのは惜しかった。とはいえ、まったく無駄だったとは、だれに言えよう？ ド・ラザレックと妖しい女との一件は、なにも代えがたいものだった。いずれにせよ、私はもう、一時間たりとも無駄にせず、これから住むことになる町を見たかった。



冬宮



カザン聖堂



聖イサアク大聖堂(左)と
聖ペテロ・パウロ要塞(奥)

私は昼の列車でリガを出て、いまはもう真夜中近くになっていた。目の前のテーブルにサンクト・ペテルスブルグの地図が置かれていた。夜明けとともに、街の端から端まで巡礼しようと心に決めた。これまでに本で知識を得ていた場所をできるだけ多く見て回ろう。ああ、冬宮はここにあるのか、聖ペテロ・パウロ要塞はここ、カザン聖堂はここ、聖イサアク大聖堂はここ、アレクサンダー二世が暗殺された場所に建てられた復活教会はここにあるのか……。そしてここに十字架の印が付いているのは、やがて私が入るところの帝国音楽院。その向かいには帝国オペラ・バレエ団の本拠として有名なマリンスキー劇場がある。



帝国音楽院(コンセルヴァトワール)



マリンスキー劇場

夜明け前の薄明かりのなか、私は初めてこの二つの建物を目にした。この二つの建物は、短い期間とはいえ、私の運命と密に結ばれることとなった。この二つの建物がたたずむ大きな広場にはだれもいなかった。朝のうっすらした光のなか、私は音楽院で盛大に開催される公演の告知にゆっくり目を通して。演奏家たちの名前は私が初めて目にするものだった。同じぐらいの好奇心を持って、私は帝国マリンスキー劇場に向かった。そこでポスターに目にした名前も私にはなじみがなかったが、私は注意深く目を通した。最近リガの新聞で、アルバート・コーツというイギリス人の若い客員指揮者の指揮によるサンクト・ペテルスブルグでワグナーの一連の公演が驚くべき成功を収めたという記事を読んでいたからだ。でも、どうやらワグナーの公演の時期はもう終わったようだった。私が探した名前はポスター上に見つからなかった。

運命のはからいとはときに奇妙で意地悪い。これからわずか二、三年のち、おまえは、もはやたんなる「客員」ではなく、ロシアじゅうで、それにドイツでも最高に抜きん出たオペラ指揮者として知られるようになったアルバート・コーツが音楽院でのおまえの勉学の締めくくりとして、広場の向かいのマリンスキー劇場へとおまえを誘い、彼の指揮するオペラ中での歌手たちの歌唱の指導を補助するように公に申し入れることになるのだぞと、もしもこのときだれかに耳打ちさ

れていたら、遅ればせながら音楽の勉強を始めたばかりの無名の学徒だった当時の私は、そんなくらくらするような高みに自分が達することを想像だにできず、「おかしなことを言わないでくれ」と言い返していたら。だが、それは現実となった。



アルバート・コーツ
(1882-1953)
ロシア系のイギリス人

太陽が黄金の輝きを放って、島に建てられたいかめしい聖ペテロ・パウロ要塞の大聖堂のきやしやな尖塔の上に昇り、世界でもっとも美しい川の広大な河口で無数のさざなみを揺らめく炎のように燃え立たせていた。いまだにいくつかのきらきら光る流水がゆっくり海のほうへと漂い、春の太陽を浴びながら消滅へと向かっていった。それらはまさに妖精のような気配を風景に添えていた。それは私がそれまでに見たなかでもっとも美しい光景で、すべての美しいものがそうであるように、一種の奇跡だった。首都の他の部分でかねがね見たいと思っていたものを巡りに出たいのはやまやまだだったが、私はこのネヴァ川の堤防沿いをなかなか離れる気にならなかった。しかし、私はそれでも名所巡りに出発し、見たいと思っていたものの多くを急ぎ足で見物した後、一日の終わりに、疲れながらも幸せな気持ちで元の場所に引き返し、ふたたびしっかりとした堤防の壁に寄りかかり、干の色に染まった西の海に太陽が静かに沈むのを眺めた。

私は川に半円状に突き出た、ぐるりが石の座面となっている小さなアルコーヴに座った。私は堤防の上面に幅二インチほど、深さ一・五インチほどの小さな丸い穴が空いているのに気付いた。一定間隔で堤防の上面に設けられたそれらの穴は、かつては祭りの際に旗を立てるためのほか、はしけを係留するための鉄の杭を差すためにも使われていた。この日は一時間だってレストランで過ごし、そうなどと思わなかったもので、私はそこでサンドイッチを食べた後、それを包んでいた紙を川に投げようとして思いとどまった。たとえ紙一枚でも投げ込むことで川の美

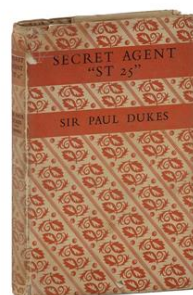
しさを損なうのは冒涇だと思ったからだ。舗道に投げけるのもためられた。私はそれを小さく丸めてから穴に押し込み、それから指を突っ込んで、しっかりと押し下げた。

だが、もしも私に未来をのぞく力があり、それから九年後の同じ場所でのことを見られたならば、私は何を目にしていただろう？ 黒いごわごわのあごひげを生やし、ぼさぼさの髪をし、眼鏡をかけ、粗い生地ジャケット、ロシア風のシャツ、黒い革のズボンを身に着け、黒い長靴を履いた男が、堤防沿いをゆっくりと歩いてきて、このアルコーヴに身を落ち着ける。彼はなにかを気にかけているようで、こそこそしたところが見受けられる。彼はアルコーヴの座面に座り、まるでそのためにそこに来たかのように、食べ物袋を開ける。彼は食べながら、努めてさりげなくまわりに目を走らせる。そこには自分しかおらず、だれにも見られていないことに満足すると、彼は堤防の上面の穴を探って通信文を取り出し、目を通すと、細かく破って川に投げる。次に彼はポケットから数枚の紙幣を取り出すと、それをくるくると小さく巻き、急いで走り書きしたメモを添えて食べ物包装紙でくるみ、穴に落とすと、奥に押し込む。最後に、別のポケットから握りの土砂を取り出し、紙が見えなくなるよう、穴に振りかけ、そしてその場を去っていく。

そして、サンクト・ペテルスブルグに到着したその日に、もしもだれかが私にこう告げていたとしたら……「あごひげを生やし、ぼさぼさの髪をして、眼鏡をかけた、どこか妖しいその男は、九年後の君じゃないか！ そのときには、ぼくらの短い音楽人生はもう永遠に終わってる。君が愛したロシアは戦争と革命に引き裂かれた。イギリスとフランスがいまだにドイツの帝国主義と戦っている最中にロシアの新政府はドイツと単独講和を結んだんだ。権力を奪取した共産主義者たちは戦場から兵士を引き上げさせ、かつての同志らを監獄送りにした。でも、イギリスとしてはなにがなんでも、何が起きているかを把握して、大義に忠実であろうとする者たちの抵抗運動を支援しなければならぬ。そして君はロシアを愛し、その言語を知っているのだから、たとえそれが隠密行動を意味しようとも、君はどうしてもこの大義を果たすべく、本国とのつながりを回復しなければならぬのだ。だから、この奇妙な男は、九年後の君であり、君が忘れるはずのないこの堤防上面の穴を使って秘密の仲間たちとメモを交換することになるのだ」。

そんなことを言う相手に、おまえは気が狂つてると、私は言ったことだろう。しかし、まさにここに描写したとおりになった。

しかし、そうしたことはもう『秘密諜報員ST25』で取り上げているので、本書ではことさら扱わない。



ポール・デュークス
『秘密諜報員ST25』

長く渡り歩いた後、ついにサンクト・ペテルスブルグの音楽と芸術の世界に足を踏み入れたのは、長い登攀を終えて頂上にたどり着き、果てしなく広がるパノラマを初めて目にするようなものだった。それまで象徴めいたものとしてその名を漠然と意識にとどめていた巨匠たちと、いまや音楽院やそれぞれの住まいで会うことができた。グラスノフ、アレンスキー、スクリャービン、ラフマニノフ、ジロティ、コーツ、チェレプニン、リャードフ、リャプノフなど。もちろん、いきなり会えたわけではない。謙虚な生徒として、および謙虚な英語教師として、自分の立場を見つけるのに一年かかった。



アレクサンドル・グラスノフ (作曲家)



アンドロ・アレンスキー (作曲家)



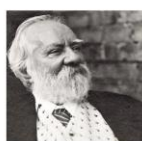
アレクサンドル・スクリャービン
(作曲家・ピアニスト)



セルゲイ・ラフマニノフ
(作曲家・ピアニスト・指揮者)



アンナ・エシポワ
(1851~1914)
ピアニスト・音楽教師



テオドル・レシェティツキー
(1830~1915)
1888年にアンナと結婚。
1892年に離婚。

しかし、最終的に私の教育の幅を広げるのに重要な役割を果たしたのは二人の人物だった。第一の人物は、音楽院のピアノ科で主任教授をしていたアンナ・エシポワで、当時の彼女の生徒にはセルゲイ・プロコヴィエフ「作曲家・ピアニスト」やアレクサンドル・ボロフスキー「ピアニスト」などがいた。全盛期のエシポワは、その時代のもっとも著名な女性ピアニストで、ロシアだけでなくヨーロッパやアメリカでも名声を博していた。彼女は音楽院での私の最初の先生ではなかった。私は最初、シュタイン教授の指導を受けたが、一年後、芸術界の著名人に囲まれるなか自分の方向性を探るなか、さらに高みを目指して、エシポワに自分を生徒として受け入れてもらえないか聞いてみることにした。彼女の目にはかなう生徒はめったにいなかったもので、私は断られるのを覚悟していた。それでも私は思い切って彼女に手紙を書いたところ、音楽院近くのオフィツェルスカヤ通りにある彼女の自宅に来るように招待された。どういうわけか、彼女は私を英国大使館員と思っていて、そうではないと知ってがっかりした。彼女が自分を招待したのはそんな勘違いからだったのかと、私もがっかりした。しかし、一、二曲、私の演奏を聴いた後、彼女はやさしく「可能性があります」と言ってくれた。そして、貴族の学校であるリセウムで私が英語を教えていることを話すと（臨時雇いにすぎなかったが）あえてそれは言わないでいた）、彼女は言った。「あなたを私の生徒として受け入れます。でも、あなたも私の先生になってください。私は英語がもっとうまくになりたい。だから、あなたにはここで私からレッスンを受けた後、私が英語の本を読むのを助けたり、私の発音を直したりしてもらいます」

そこで、授業の対価は授業で払うということになった。一見すると彼女の態度は厳格で、威圧的でさえあった。というのも彼女は規律を守ることに関してきわめて厳格だった。彼女には男性的な面が多くあり、彼女のもっとも著名な生徒たちはいずれも、演奏の力強さと繊細さの両方をもって知られることとなった。彼女の詩情は男性的な根から花開いた。彼女はあるとき私に、彼女の師であり元夫でもあるレシェティツキーによる、すべての芸術家は「男であるとともに女であるべきだ」という言葉が強い印象をもって心に残っていると聞いた。

理性と論理が彼女の教育法の基礎だった。私はアンナ・エシポワから、芸術において、そして人生においても、もっとも力強い感情表現は、思考と計算、そして効果の慎重な測定を通じて達成されるという重大な真理を学んだ。